

実録の中の片桐且元

高 橋 圭 一

一 時間稼ぎ

豊臣方の忠臣片桐且元（弘治二年一五六六～元和一年一六一五）像は、徳川畠原の実録『難波戦記』（寛文年間一六六一～七三以前の成立）が作り上げたものである。本稿では、まずこのことを検証する。そのために、『難波戦記』から且元に関する記述を拾い出してゆく。実際に且元が忠臣であつたか否かは、後に多少触れるところではあるが、本稿の明らかにしようとするのではない。

1

且元は『難波戦記』の第二条（大仏殿再興の事）で早くも登場する。冬の陣開戦に至るまで、『難波戦記』の主役は且元である。彼は、大御所家康に大野治長と共に呼び出され、秀頼と淀殿に大仏殿再興を勧めるよう言い含められる。工事は慶長十四年（一六〇九）に始まり、十九年に完成する。開眼供養を明日に控えた日、京都にいた且元のもとに京都所司代板倉勝重からの使者がやってきた。「大仏殿の鐘の銘に関東調伏の句があり、また棟札（棟上げに際し、工事の由来や施主・大工等を記して、棟木に打ち付ける札）の書き様もよろしくない、と言う者がある。家康様の御機嫌がよろしくないのです、供養は延期せよ」との口上が伝えられる。且元は「後で申し訳が必要なら自分が切腹

するので、供養を執り行わせて欲しい」と嘆願するが、板倉に許されず大坂に帰る。

ここに『豊内記』という大坂の陣の軍記がある。「秀頼事記」「秀頼物語」等の別名もあり、漢字片仮名交じりで約六万一千字、二十四条から成る。出版はされず、写本で伝わっている。全体の字数は『難波戦記』の三分の一程であるが、『豊内記』には政治のあり方を論じた部分かなりあり、その論を除くと大坂の陣についての記事はさらに少なくなる。秀頼に対しては明君の素質があったと好意的な書き方だが、ことあるごとに家康を賞し、家康を「我君」と呼び、東軍を御（味）方と称する。徳川寄りの作である。『豊内記』の成立年は確定しがたいが、『難波戦記』がこの作から多くを得ていることは、戦国軍記を研究されている笹川祥生氏の指摘がある。『難波戦記』寛文十二年（一六七二）増補本の序には先行する作品名が列挙されているが、その最初の「秀頼軍記」はこの書を指すのであろう。『豊内記』は上中下三巻から成るが、上巻の大仏供養から冬の陣開戦、和睦までを、『難波戦記』はすっかり取り込んでいる。先の板倉とのやりとりなどは、『豊内記』にやや潤色を加えた程度である。

『難波戦記』に戻って、家康に対する申し開きのために、片桐且元・弟主膳正元重（貞隆が正しい）・大野治長が駿府に下る。且元の旅宿を訪問した本多正純から、浪人を招集して合戦の用意をしていること、武器を貯え戦闘の演習をしていることを誰もが怪しく思っていた矢先に、今回の鐘銘問題が起こったとなじられる。その後、且元らは四月から七月まで逗留したが家康との対面も無く、七月末には家康から三人ながら大坂を長く留守にしていって良いのかと問われ、且元一人が残る。片桐主膳正と大野治長はこの作では何の働きもしていない。いわば無駄な名前が二つ書かれている。状況を危ぶんだ大坂の淀殿と秀頼は、八月に大野治長の母大藏卿・渡辺内藏助純の母正永尼・渡辺筑後守の母二位局の三女を新たな使者として送る。家康はこの三女にはすぐ対面し、徳川と豊臣の間に何も問題はないと機嫌よく振る舞い、江戸に下るよう促がす。九月上旬に至り、且元方へ本多正信（正純の父）と天海上人が来て、「家康様はこのままでは戦乱が起けると案じておられる。天下が鎮まる方策を考えよ」と言う。且元から案を教

えて欲しいと請われた本多正信は、自分の考えとして、以下の三か条を披露する。「一、秀頼が大坂城を出て他国に移る。二、秀頼が関東へ下向する。三、淀殿が関東へ下向する」「この三か条のうちの一条でも秀頼公が得心するならば、天下は泰平。」且元は、初めは三か条いづれも天下の大事であって、家来の身で決めがたいと思ったものの、また、三か条は本多正信の私意ではなく、家康の内意を受けたものと思いつき、一条も承知しなければ直ちに合戦になると考え、秀頼に三か条を説得することを約束する。

九月九日重陽の節句に、且元は漸く家康との対面が叶う。家康から、「日本中の浪人達が大阪に充満しており、秀頼の近臣は武器を集め軍事の練習を行っている。そのため、世間の者は合戦が始まると不安に思っている。その上に、今回の鐘銘の『国家安康』は家康を切つて国を安んずるという意であり、自分を呪う意図は明らかだと評判になっている。大坂方は謀叛を企てているのだろう」と糾問され、且元は必死で抗弁する。家康は一応聞き届けた上で、「自分が死んだ後、必ずや將軍秀忠と秀頼は不和となつて兵乱が起こるだろう。それを防ぐよう計れ」と言う。ここで且元は先に本多正信から突きつけられた三か条を持ち出し、その中でも淀殿下向のことを是非秀頼に説得する―太閤秀吉が、母を人質として家康に差し出した先例もあるので―と返答する。加えて、且元は淀殿下向については品川辺で四五町四方の屋敷を新しく建てたいと願つて許される。このこと（淀殿人質、屋敷地拝領）を江戸から戻つた三女は駿河の城で人から聞いて、且元が裏切つたと驚き怒る。三女は浜松で且元と会つて、この時初めて彼から三か条のことを聞くが、自分たちは初耳であつたのでこれを信用せず、「且元謀叛」との飛脚を大坂に送る。三女は京都に寄つた且元より一足早く大坂に戻り、且元のことを淀殿・秀頼に散々に讒言する。やがて且元が帰坂し、三か条のことを言上するが、激怒している秀頼・淀殿は聞こうとしない。

このくだりも『豊内記』に基づく。ただし、『豊内記』は僅か六百字ほどの記事であるが、『難波戦記』はそれを約十倍に膨らませている。『豊内記』では、三か条は、本多正純から「秀忠と秀頼が今後不和に成らないような案を出

せ」と言われた且元が、その場で考え出している。『豊内記』には本多正信との問答、家康との問答もなく、それらはいずれも『難波戦記』が付加したものであった。悪名高い鐘銘問題も、その前に大坂方の不穏な動きが語られると、あながち無理な言いがかりとばかりも思えなくなってくる。徳川忠貞の『難波戦記』の工夫である。『豊内記』に片桐主膳正・大野治長は登場せず、三女ではなく大藏局と正栄尼の二女である。『難波戦記』は登場人物も増やしている。且元の孤軍奮闘の描かれたこのくだりで、最も気にかかるのは、且元が請け合った淀殿下向とそれに伴う品川の屋敷地の件であろう。『豊内記』に見えるのは三か条を提案することまでである。つまり、この件は『難波戦記』の創作である。屋敷地拝領を三女は、「それこそ且元謀叛の証拠」と騒ぎ立てたが、確かに気が早すぎるのではないか。この時点で決めなければならない理由はあるのだろうか。もう少し、『難波戦記』を読み進めよう。

織田信雄入道常真の意見によって、城内の自宅に居る且元のもとに、七組頭の一人速水甲斐守時之が使者として遣わされ、且元は淀殿下向を請け合った意図を尋ねられる。ここから且元の長い弁説が繰り広げられる。「大坂が武器を集め合戦の演習を行っていること、浪人を招いていることが不審を抱かれており、加えて今回の鐘の銘である、とても陳謝する言葉などなかった、その後に出されたのが三か条である。これは家康様の心中より出たものに間違いない。三か条の内一つも承知しなければ、必ず合戦となる。淀殿下向のこと、屋敷地のことは自分の深謀遠慮である。」以下、且元の深謀遠慮を語った原文を、片仮名交じりを平仮名交じりに直した以外は、ほぼそのままに引用する。・・・()・・・の部分是要約である。

抑且元、御母儀御下向の事と宅地との事を申したるは、遠き慮り有りて也。その故は関東の御所望一つも承引なくんば忽ち合戦に及ばん。尤も当城は無双の要害たりと云へども、大名数輩の荷担なくんば一戦に利を失はん。・・・(家康・秀忠を大名から庶民にいたるまで慕っていて、大坂に味方する大名は一人も出てこないだろう。今関東と戦うのは余りに無謀である)・・・急難を通れんため淀殿御下向の儀肯ひ、品川辺に於いて宅地の

事を所望す。その故は彼の所は地形平らかならず、然るに四五町四方を請け取り、地形せんと披露して日を送らば、定めて一年を歴べし、その後大坂より材木を回し、普請致すと称して又数月を送らん、その後普請出来すと云へども、淀殿御病氣と号して亦御下向を延ばさん。……（この間に謀略によつて味方の大名を拵え、兵士を育てよう）……家康公の御年既に七旬余、幾年か御存命たるべき、御他界に於いては必ずしも天下に妾有らん、然る則は時分見合はせ謀何程も有るべし。是を思ふ故に斯くの如く計らひき。

逐語訳は不要だろう。七十を超えた、――現在ならば八十、いや九十歳以上の感覚か、高齡の家康が他界するまでの時間稼ぎだった。『難波戦記』の作者は、家康が夏の陣の翌元和二年（一六一六）四月に没したことを知って執筆しているし、読者もそのことを知っている。且元の計略は実行されれば、成功率は高かったと思われたはずである。且元は豊臣家起死回生の名案を思いついた忠臣であつた。しかしながら、この名案は大坂方の受け入れるところとはならず、この後も紆余曲折の末、片桐且元と弟主膳正は大坂城を出ることになる。（次節参照）

淀殿下向と屋敷地拝領は『難波戦記』の創作だった。が、時間稼ぎということにポイントを置くと先蹤作が浮かび上がってくる。『翁物語』である。「翁」は武田流軍学の祖小幡景憲（元龜三年一五七二―寛文三年一六六三）で、彼の高弟であつた小早川能久（生没年未詳）が師説を聞き書きしたものを主な内容とする。出版こそされなかったが、写本で相当に広まった本である。奥書によると承応一年（一六五二）から明暦二年（一六五六）にかけて、若侍辰之助・鴨之助・又助（苗字は記されない。あるいは息子か）への教訓の書として著された。小早川能久について少し付け加えると、彼は毛利元就の孫であり、正保三年（一六四六）に讃岐国高松藩主松平頼重に仕えて藩士に軍学を教授した人物である。以下「翁物語」の一節を引く（『大日本史料』第十二編之十四所収）。

ある時、片桐市正（且元）所に居たる侍語りて曰く、（小幡景憲以外の人物の話も、『翁物語』には多く収められている）……市正と右京大夫○大盛卿と申す女儀を関東へ召し下され、「秀頼公、江戸幕下へ御下向有つて然る

べし」と市正に仰せ渡さる。市正は「御意その旨を存ずる」と御請けを申す。右京大夫は、この事更に氣に入らざる体なりしかども、市正御請けを申す子細は、「只今、秀頼公関東御下向成るまじくと申し切るにおゐては、則時にむつかしき事出来しやうたひすべく、その時に至り、俄に秀頼公弓箭きうせんを思し召し立つといへども、家康公御存命の間、とかくとして勝利を得る事有るまじ。先ず江戸へ御下向有るべきとの御請けを申し、秀頼公に合点させ申し、その身又江戸へ罷り下りて、御下向有るべき由を申し達すに、早半年もかゝる也。左有りて、江戸に於いて秀頼公の御屋敷を申し請け、旁かたがたする内にその年も暮れぬべし、その後屋敷の普請に取り付き、何ほど大きな普請を仕るにおゐては、是緩ゆると二年はかゝるべし、左有りて普請成就して、秀頼公、母公御同道有りて下り給はんと有るべき刻、母公病氣也と関東へ披露して、その養生にとり懸かり給ふ内に四五年に及ぶべきは目の前也。然れば則、家康公大老にてまします間、その内に、大形おほなたちは御命の程も限り有るべし。その刻を待ち請け、内々筋目有る大名には内通を廻からし、大坂をこしらへ、関東に手切れして、戦を企むにおゐては、利と成る事有るべし。」

『翁物語』の秀頼を淀殿に代えれば、そのまま『難波戦記』の記述となる。偶然の一致とは考えられない。大坂城の主である秀頼が母淀殿と共に江戸に下るのは、この時点では非現実的なので、淀殿一人を人質に差し出すとしたのは、修正と言える。品川・四五町四方という具体的な地名・数字は話を真実らしく見せかけるために挿入したに違いない。つまり、『翁物語』が先にあつて『難波戦記』が作られたのであつて、その逆はありえない。どうやら、『難波戦記』の成立には兵学者、もしくはその著作が関わっているようである。

徳川量廩の実録『難波戦記』が、どういう理由から且元を大坂方の忠臣に仕立てあげたのか。続いて、このことについて考える。『難波戦記』の主張を平たく言えば、第一に家康様は偉かった正しかった、第二に大坂方は愚かであつた滅びたのは自業自得であつた、という二点である。因みに、この二つの主張のうちの第二は、豊臣量廩の実録に

よつても受け継がれた。大坂方に希望をもたらずはすの且元苦心の名案を、淀殿・秀頼、大野・渡辺らの愚将は受け容れなかった。それどころか、且元を裏切り者として追放した。無謀な戦いへ突入したのは、大坂方の愚人たちのなせる仕業である、という大坂の陣起因論を『難波戦記』は拵えあげている。且元は家康にも対抗しうほど聡明な政治家であつた、とその賢明さを強調すればするほど、彼を退けた大坂方の愚かさが際立つ。同時に大坂方を手玉に取つた家康の老獪さは、余り表に出なくなる。以上のような思惑から、『難波戦記』は忠臣且元像を作り出した。

冒頭から長々と『難波戦記』の且元を追ってきたが、そろそろ後続の実録にも目を向けるべきだろう。冬の陣以前の且元を、明和年間（一七六四～七二）以前に成立した『厭蝕太平楽記』は以下のように描いている。

豊臣家の石高を百万石と徳川から決定されたことに憤慨した木村重成が、駿府に攻め寄せることを主張し、薄田隼人兼相らは賛成する。ところが、且元は秀頼が関白になれば何事も自由になるので、一兩年は見合わすべしと抑える。この大坂城内の評定を浅野幸長から聞いた家康は、且元の深慮を誉める。秀頼の関白職は結局叶わなかったが、且元はなおも家康は老年なのだから時節を見合わせるようと、城内を説得する。

三か条と且元の申し開き、淀殿下向・屋敷地拝領については、『難波戦記』よりやや長くなるもののそれほどの違いはない。帰坂後、且元は淀殿から謀反人と決め付けられ、大坂城内の自邸に引き籠もっていると、秀頼の上使として今本源左衛門正祥と速水時之がやって来る。且元は「淀殿のために、品川で四町四方の屋敷が欲しいと要求したのが、即ち自分の忠義を証明するものである。実は朝鮮の役の際に、明の名医伯智が『太閤の寿命は六十三、前田利家は六十八、浅野長政は七十四、徳川家康は七十五』と脈を見て予言するのを聞いた。家康以外の三人の寿命は悉く的中した。家康の命は残り二年である。屋敷造り等で時間を稼ぐつもりであつた」と言い開き、今本・速水はその智謀に感嘆する。

明の名医などを識しやかに登場させて、『難波戦記』の且元の行為を一層正当化していることが読み取れる。この

ような増補を実録研究の先達中村幸彦氏は「娯楽的附加」と称された。その典型的な例として挙げてよいだろう。

順序が逆になったが、『厭蝕太平楽記』より早く成立したと思われる田丸具房の『難波戦記大全』に目を向ける。

三か条、淀殿下向・屋敷地拝領から且元兄弟の大坂退去のあたりは『難波戦記』を踏襲しているが、且元の人物が『難波戦記』より、一回り大きくなっている。且元は忠誠無二、楠正成にも劣らないとの最大級の賛辞が贈られる。

近臣には大野治長・治房兄弟とその父道犬に代表される佞人が多かったが、且元が城中にある間は磐石であった。家康もそのことは承知しており、且元は大仏殿再興の奉行を命じたのは、「且元が長く在京すれば必ず大坂城内で騒動が生じ、謀叛を起こすだろう。それに乗じて大坂を討とう」という計略であった。この計略も且元は見抜いていたものの、結果としては家康の目論見どおりになってしまった。それでも、徳川の重臣大久保忠隣が流罪になったのは、忠隣が大坂と内通しているという噂を且元が徳川の間者に流したためである、といった彼の暗躍も書き加えられている。

続いて、幕末に成立した難波戦記物の実録中の最長編『本朝盛衰記』に移る。『難波戦記』で且元と共に、片桐主膳正と大野治長が駿府に下ったが何の働きもなかったと記した。『厭蝕太平楽記』にはこの二人は登場しなかったが、『本朝盛衰記』で復活する。徳川との交渉ではやはり何の役にも立たなかったが、二人が且元より先に大坂に帰るに際し、且元から命じられて弟主膳正が奸臣大野治長を討とうとすることが挿入されている。大野は逃げ出して事なきを得るので、大勢には無関係である。が、先行作は隅々まで利用するのが実録の方法であると私は考えており、その好例であると思う。二人の帰坂の後、且元と家康との交渉が始まる。そこでは、三か条が持ち出される前に、家康との問答が置かれていることが目を引く。まずは家康から、淀殿の千姫に対する仕打ちや浪人を集めていることに對する、五か条の不審が且元に示される。且元は即答せず、本多正純を通じて秀頼が十五歳に達すれば天下を譲れとの太閤の遺言を初めとする、七か条の難問を以て反論する。家康は且元を召し出し、「自分の五か条・且元の七か

条、共に言い捨て・聞き流しにしよう」と言う。家康との問答による直接対決に、且元は勝利した。家康をも凌駕する智将且元の面目躍如である。そんな智将且元でも、大坂城を出て行かざるを得なかった。秀頼を大坂城から脱出せしめた実録作者も、且元の大坂退去を変えることはできなかった。

二 大 筒

片桐且元兄弟の大坂退去は冬の陣突入を意味していた。このことは当時の人々には、よく理解されていたようである。大坂の陣直後に成立した仮名草子『大坂物語』の以下の記述は、そのあたりの様子を雄弁に語っている。

然る処に、慶長十九年の春の比しひより、世上何となくさ、やく事多かりければ、秀頼の老臣片桐市正を関東へ召され、大坂の仕置き仰せ渡されるところに、いか成事がありけん、秀頼御ゆういんなく（受け入れず、であろう）かへつて市正を勘当なされ、大坂御用心ありければ、市正大坂にこらへかね、弟主膳を相具し、三百余騎にて茨木へ引き籠る。大坂に残る諸侍、思ひよらぬ事なれば、鎧を着れども甲かぶせを着ず、馬に乗れども鎧よろいなし。籠やみよ長刀ながたきよとひしめきて、上下馳せ違ふ事おびたし。

徳川譜代の忠臣で旗本の名物男大久保彦左衛門忠教ただたか（もつとも、そのイメージは『大久保武蔵鎧』という実録によって形成されたもので、実像からは程遠い）が書いた徳川家と大久保家の軍記『三河物語』（元和八年一六二二―寛永三年一六二六頃成立）でも、「片桐市正は家康に加担しているので成敗しよう」という声が城内であがったために、且元は退去した、そこで、大坂の謀叛は間違いないとして大軍を催し、大坂に攻め寄せたとある。

ところが、『難波戦記』はそのあたりが微妙で、わかりづらい書き方になっている。大坂城退去までの且元の動きを、再び『難波戦記』で追ってゆく。

且元の時間稼ぎの計略を速水時之は言上し、秀頼も納得する。奸臣大野治長・渡辺胤は且元を誹謗し、秀頼に断わりなく且元を暗殺する計画を立てる。且元を城内へおびき出し殺害しようとするが、この計画を織田常真から事前に知らせられた且元は、病氣と称して自邸に引き籠もる。弟主膳正も行動を共にする。且元は京都の板倉勝重に自らの窮状を訴え、援兵を乞う。且元邸には一族郎等が集まり、合戦の用意をして立て籠もる。これに対して城中も合戦の準備をし、且元邸の隣家織田有楽邸に兵士を入れる。秀頼の近臣の今木正祥などは且元に同情し、「城内に乗り込み、大野兄弟らを討て」と勧めたが、且元は「秀頼に対する謀叛となる」と取り合わない。今木から且元の忠心を聞いた秀頼の心も溶け、秀頼・且元の和解が成立する。一方大野・渡辺はこの和解を憤り、勝手に且元を討とうとする。且元は「大野・渡辺には応戦するが、御城に向かつては矢鉄砲を向けるな」と命じ、数日間ならみ合いが続く。その間も七組の者達は且元に同情的である。先に使者を勤めた速水時之が間に入って大野と且元を和睦させ、且元には彼が大坂城においては騒動が収まらないということで、高野山に蟄居することを約束させる。且元の弟主膳正は高野山へ行くように勧めるが、且元は「命惜しさに出家したと言われるのは口惜しい」と茨木へ向かう。

秀頼と且元の心は通じ合っていたのに、且元が大坂を出ることになる理由が何度読んでも納得できない。要するに、且元はあくまで秀頼に忠誠を尽くしている、悪いのは大野・渡辺の一派のみである、しかし且元は大坂城を退去せざるを得なかった、この三点を押さえて、なおかつ自然なストーリーを作ることには難しかったということだろう。且元が大坂城を出る前、大野らとにらみ合い状態にあった時、板倉勝重から本多正純にその状況が注進される。正純は家康に書状を披露して密談に及び、駿府から京都までの道筋の大名に、京都へ上れとの命が下される。且元の動向に比べ、ごく短い記事であるが、『難波戦記』の作者も且元退去が大坂の陣を導いたことは、充分承知していたのである。後続の『厭蝕太平楽記』『本朝盛衰記』は『難波戦記』のややこしい部分はすべて削除している。せつかくの時間稼ぎの案が淀殿に聞き入れられなかったので、すぐ退去したと記すだけである。『難波戦記』の典拠である『豊

内記』は且元を忠臣として造形していないので、それほどわかりづらい印象は受けない。『難波戦記』が都合の悪い記事を捨て去ることが出来なかったため、無理が生じたということだろう。

もう少し、冬の陣突入後の『難波戦記』を読みすすめる。

大坂方が堺に攻め寄せると聞いて、堺の代官は且元に加勢を乞う。早速且元が部下を遣わしたところ、彼らが堺に着いたときには既に堺は大坂勢が制しており、敗退する。加勢として送った軍勢も、大野勢とあたりの百姓たちによって散々に打ち取られる。

たとえ相手が奸臣大野とは言え、ここでの大野は勝手な戦さをしているわけではない。且元は、大坂方と間違いく戦端を開いているのである。

京都町奉行所与力神沢杜口の随筆『翁草』卷之百四十四から「大坂御陣論」の一節を掲げる。

世に片桐市正を忠臣とし、大野修理を奸臣とす、是一概の論なり。片桐は真忠の人に非ず、……(且元の行為は)俗諺に云ふ、君を思ふも身を思ふの意なり。去れば駿府に於いて御難題の御請けは尤も慮り深き善言なり、智に於いては愧ずる所有るべからず、この言忠より出たらんには、大坂へ帰りて讒者の為に潔く自刃するか、責めても世を避けて高野山へも登らば容すべし。讒者に一矢射んと我館に引き籠もり、しかして在所茨木へ立ち退き、剩へ東君の仰せに仍て寄せ手に加わり出陣せしは豈忠と云はんや。……忠臣顔をせし片桐は敵と成り、奸臣と悪まれし大野は秀頼公生害の供をしたり。

神沢杜口が扱ったのは『難波戦記』と思われるが、且元を忠臣とするのはおかしいとしている。

戦国期から近世初期までの、戦場美談の類(『武辺咄』という)を集めた『武将感状記』(熊沢淡庵編 享保一年一七二六刊)では、且元は罵られている。

摂州野里村の三右衛門は農人なれども勇を好んで勢ひ強し。これによりて、一度兵を起こさば隣邑悉く之に属

す。片桐東市正且元、故ありて大坂を出で茨木の城に入る。大坂の兵、泉州堺の政所（代官所）を攻むると聞きて歩騎二百許りを遣はして、政所を救はんとするに、三右衛門、近辺の郷民を催し聚めて大半撃ち捕りたり。且元齒を切みて怒れども力及ばず。源君、天下を定め給ひて後、且元鬱憤なほ解けずして之を訟ふ。さるに依りて（家康は）三右衛門を召して、決断所に於いてその事を責めらる。三右衛門且元を睨みて、「貴殿故太閤の重恩を荷ひて権を取り威を逞しうす。されば死を守りて忠を尽さるべきに、危難の時に方つて君を忘れ、身を顧みて城中を躁動せさせらる、事、武臣の本意にあらず。この時貴殿、敵とも身（味）方とも更にその心中を測り知らず、我等貴殿の士卒を討ち捕つたる事、あながちに罪とすべからず。道に叛きて富貴ならんよりは、義を存して滅亡するにしかじ。貴殿自ら慙ぢざるのみに非ず、却つて人を讒言せらる、条、顔の厚きなり」と、憚る所なく申しければ、且元も閉口す。・・・（この後、家康は三右衛門を咎め罪を許す）（卷之一）

且元は「閉口」した。反論することができず、口を鎖すことしかできなかったのである。因みにこの説、『本朝盛衰記』二篇の且元高野山入りのくだりの「評」で取り上げられ、「大いなる妄説」と一蹴されている。確かに、且元は夏の陣終結直後に病没しており、右のような事実はなかったのであるが、且元不忠説が江戸時代に存したことは疑いようのない事実である。

外国人宣教師はこんなふうには且元を見ていた。『訂正日本西教史』下第十五章から（『大日本史料』第十二編之十五所収）。

公方（家康）は計略の行はれざるを以て、憂鬱を抱き、遂に大坂城を攻めんと志を決し、且つ大坂城の諸將を反せしめ、己れの旗下に合はせしめんとし、嘗て恩義を施したるいちのかみ市正片桐且元と称する大坂の奉行を徴召し、之れを詰むるに、その主秀頼、大仏堂に寄附せんが為め、非常なる大鐘を鑄造し、之れに公方を毀害し、榮譽を損すべき文字（国家安康）を彫刻したるを以てし、その後いちのかみを別室に誘引して、大坂城を陥れ、天下を

己れの世子に伝へんとするの密事を明言し、為めに力を尽さんことを乞ひ、又秀頼に反するとも、その身（且元）に於いて更に損害を來たすの恐れ無きのみならず、己れ能くその志を達するを得ば、之れ（且元）を一大諸侯と為すべしと誓約しけるに、いちのかみは公方と同じく性質狡猾なれば、大坂城及び秀頼を公方に付す可きを約し、然る後ち大坂に帰り、秀頼は大仏堂の大鐘上に、公方の榮譽を損傷する文字を彫刻せしめ、之れが為め、公方の憤を招きたりと、各地に布言し、又屢之れを口述するを以て、諸人も之れを疑ひ、強めて事件を搜索し、終にいちのかみの、公方と隠密の關係あるを發覺して、之れを捕らへんとするに因り、いちのかみは已むことを得ず、大坂を脱し、身を公方に託したり。ここに於いて、公方の陰謀著明なるを以て、秀頼は軍備を為し、城を固め、嘗て父の太閤に勤仕したる各地の將校を徵召せり。この將校の内に、公方の曾て追放したる基督信者も多く加はりたり。

引用の末文が、宣教師たちが大坂寄りであつたことを、その理由と共に明らかにしている。宣教師たちの目から見た且元は、家康同様に狡猾で大坂にとつては裏切り者であつた。先の『武将感状記』の記事と合わせ、「裏切り者」且元という像は江戸時代において決して奇異なものではない。

近代の史家で且元に甚だ辛い評価を下したのは、太閤研究で知られる桑田忠親氏である。その著『淀君』に言う（「九 大坂陣と淀君」）。

五月八日、寄せ手に加わつていた片桐且元は、秀頼母子の所在を秀忠に報告した。この行為こそ不快極まるものであつて、且元の人となりの卑劣さが遂に暴露されている。大野治長などの純粹な行動と比べれば、且元こそ本當の裏切り者であらう。彼をあれほどまでに頼りにしていた淀君や秀頼に、最後に煮え湯を飲ませたのだ。坪内逍遙は史劇『桐一葉』を書いて、且元を大坂城中の柱石とし、その苦忠を賛美し、大野修理をもつて獅子身中の虫になぞらえた。しかし、このような史観は、江戸全盛期にものされた講談本の焼き直しにすぎない。

「講談本の焼き直し」——この「講談本」には『厭蝕太平楽記』も含めてよいだろう——、私もその意見に同意する。ただ講談本に始まるのではなく、『難波戦記』が祖であると主張したのである。

東大教授兼初代史料編纂所所長であつた辻善之助氏が、大正二年（一九一三）に「片桐且元論」と題して講演した。その講演は以下の言葉でしめくくられている。

且元には惜むらくは、（高橋注　加藤清正のような）威信と重みは殆ど備へて居なかつたのみならず、智慮に於て及ばざること、甚だ遠かつたのである。要するに且元は伝へられてゐる如く、非常にえらい人間ではないけれども、一方に伝へられて居る如く、悪い人間ではない、極平凡な人であつたらうと思ふのであります。

氏は大坂の陣の資料を最も浩瀚こうかんに集めた『大日本史料十二編』を編纂した人であり、その且元評には、今もお重みがある。現在に至るまで、史家の片桐且元評は大体この線に落ち着いているように、私見では思われる。

さて『難波戦記』の且元は、開戦後豹変した。そのことを最も鮮烈に印象付ける事件が、慶長十九年十二月十六日に起こつた。冬の陣も大詰めの日である。

家康が牧野清兵衛・稲富宮内・大工中井大和を召しだし、「鉄砲名人数人を選んで、敵の櫓を打ち破らせよ」と命じる。三人は相談の上、「備前島の片桐且元の仕寄場しよりばが城中へ近いので、そこから打とう。且元は案内者なので、なおさらそこがよいだろう」ということで且元の攻め口に行く。三人は且元と相談し、城中の遠近や方角を詳しく聞き届けて、淀殿の御座所を目掛けて大筒数百挺を一斉に打った。弾は忽ち一つの櫓を打ち崩し、その上淀殿の侍女七八人を撃ち殺した。

大筒でねらうべき場所をこと細かく教えたというのだから、且元は大坂方からすれば、実際に大筒を撃った牧野・稲富と同罪である。憎しみは彼らに対するよりも遥かに増さるだろう。『難波戦記』としては、最早「忠臣」且元は御役御免ということかも知れないが、且元が大坂城を退去するに当たって豊臣家を見限り、徳川家に忠誠を誓つたと

というような説明は、これまで見てきたように無い。つまり、且元の人物像に一貫性がない。小説とすれば未熟、と評すべきである。

苦惱の忠臣且元のイメージ定着に大きくあずかったのが、坪内逍遙の史劇『桐一葉』（初演明治三十七年一九〇四）『沓手鳥孤城落月』（初演同三十八年）であることは、その後の上演頻度からしても間違いない。この二作の記述の源は『難波戦記』である。逍遙が執筆に際して直接参照したのは小宮山南梁（やくすけ）（綴介。文政十二年一八二九）明治二十九年一八九六 江戸後期、水戸藩の漢学者として知られた小宮山楓軒（かふう）の孫）の『徳川太平記』であつたらしいが、その『徳川太平記』が『難波戦記』に多くを得ている。逍遙は、この大筒一件はそのまま採り入れるわけには行かないと考えた。「なかんづく淀君の座所へ大砲を打掛けたといふ事実に関する疑問が未解決の姿のまゝで残つて、忠か不忠かと疑はれてゐるのを、此作と『桐一葉』とで描写し解釈して見ようといふのが作者の志であつた」と自ら語っている。

逍遙の解釈が開陳されているのが『沓手鳥孤城落月』第三幕第二場「本丸桜門前」である。且元の台詞の一部を抜き出す。

「豊国さまへの申しわけに、せめてもお家の社稷（しやく）ほどは、いかで百歳の後までもと、東西の間に奔走なし、大御所を説き、速水甲斐、大野修理、其他兩三輩同意させ、和睦の内約整うたりしが、只眼前の勝利を頼む野猪（みめし）の如き浅智の輩、まった二つには御母公御猜疑（ごさいぎ）深く、事破れんとしたりしゆゑ、速水甲斐と申し合はせ、物体なくも、淀殿の御座所を目がけ石火矢を、二度（ふたたび）までも打ちかけし、其計略図にあたり、御母公果たして怖れたまひ、御ん和議となつたりしは、・・・」

威嚇して和議を承知させるために、御座所目掛けて大砲を打つというのは、計略としてはどうであろうか。淀殿自身に命中する可能性が高く、それでは元も子もない。やや説得力に欠ける、というのが私の印象評である。

その点、安部龍太郎氏の小説『密室大坂城』は、なるほど私に膝を叩かせた。

淀殿はかつて朝鮮での戦を辞めさせない病中の秀吉を毒殺した。その過去を家康に知られたため、豊臣家と徳川家を勅命によって和睦させようという片桐の計略は結局水泡に帰する（太閤を毒殺した者を、朝廷は庇うのかと家康は勅使を恫喝する）。計画が失敗に終る以前に、家康が淀殿の太閤毒殺の証拠を得たと知った且元は、先手を打って淀殿を撃ち殺そうとした・・・。

淀殿を殺すことが即ち豊臣家への忠、大坂城に向かって大筒を打たせた且元が、見事に大坂の忠臣となりおおせているのである。

話が現代にまで飛んだ。江戸に戻ろう。『難波戦記』でこそ忠節を全うしなかったが、大坂鼠負の『厭触太平楽記』の中では、且元は終始大坂の忠臣である。ここでは、大筒の件は以下のように修正される。

城を離れる自分を追ってきた木村重成に向かって、且元は「自分はこれから関東勢に身を寄せるが、その中にあっても心は秀頼様の傍にある。そして一度は君の御大事をお知らせする」と約束する。やがて冬の陣の最中、鳴野・今福合戦の直後に重成のもとへ且元からの書状が届く。それには「自分の陣所から大筒で丑寅の櫓を打ち崩そうとしている。淀殿には早く櫓から引き取るように」とあった。「一度は君の御大事をお知らせする」ことを実行したのであった。書状には大筒が裂けるように仕掛けをする、とも書かれていた。東軍にあっても且元の大坂への忠心は一貫していた。このくだりは、『本朝盛衰記』でも全く変わらない。

三 スカウト

片桐且元は冬の陣までは主役だった。が、その後はほとんど働き場所がない。東軍に身を置きながらできることと

いえば、大筒を使い物にならなくすること位が関の山だろう。京都で病死したのは影武者で、本物の且元は秀頼と共に薩摩に下ったとするような実録も見つかっていない。そこで、且元の活躍は大坂の陣を遡って記されることになる。冬の陣・夏の陣で活躍した大坂方の豪傑・勇士たちの多くが且元にスカウトされたことになってゆく。

『難波戦記』には、まだ且元のそのような動きは一切書かれていない。『厭蝕太平楽記』で、加藤清正が且元・木村重成・薄田兼相に「真田幸村と後藤基次を召し抱えよ」と遺言し、大仏殿再興工事の最中であつた且元が真田と後藤を招く。後藤はすぐに入城し、真田は「いずれよい折りを見計らつて入城する」と返答する。上首尾であつた。その後、鐘銘の申し開きのために駿府逗留中の且元は、重成を駿府から帰坂させる折りに、九度山の幸村を直ちに呼び寄せるよう指示する。大坂城を退去する且元を追つて来た重成に、自分がこれまでにスカウトした豪傑たちの名を明かす。まずは、封書に一人の名を書き、「この方を軍師として迎えたなら、日本に唐土の軍勢を加えて攻められても、大坂は落城しない」と言う。幸村である。続いて、「後藤基次・長曾我部盛親・南条中務太夫・牧島玄蕃允・仙石宗也斎等々、彼らも秀頼様にお目見えさせておいた。加えて御家人の内では、木村主計頭・御宿勘兵衛・和久半左衛門らが忠臣である」と言い残す。

『本朝盛衰記』に且元が最初に登場するのは、秀吉が亡くなる少し前の事である。且元一人が秀吉の枕元に呼ばれ、秀頼の守護を頼まれる。且元は家康と前田利家に、秀吉宛ての誓紙を書かせる。秀頼が十五歳に成れば天下を譲るなどの内容である。秀吉はこの誓紙を臨終の時まで首にかけていた。登場早々、且元は智将ぶりを発揮している。且元がスカウトする者は、『厭蝕太平楽記』より遙かに増える。例えば塙団右衛門直之^{はなぐんえもんなおゆき}である。『本朝盛衰記』は大坂方の勇士の経歴を一人一人詳細に語っている。塙の場合も美濃斎藤家の浪人であつたことから書き起こし、大坂の陣当時は浪人して乞食坊主となつていたとある。その塙が大坂方が浪人を集めていると聞いて入城し、且元に仕官を申し入れる。且元は早速秀頼に言上して五千石拝領させ、さらに塙に大坂町奉行を命じる。『本朝盛衰記』は、全く別

の敵討物の実録『天下茶屋敵討真伝記』を吸収しているのだが、討手である林源次郎と鵜幸右衛門いさぎを援助したのも且元と木村重成、それに且元によって大坂町奉行に抜擢された塙団右衛門であった。林・鵜の二人は見事本懐を遂げ、且元の推挙によって秀頼に召し抱えられる。二人は後に真田幸村の影武者として活躍する。且元はいい人材をスカウトしたのである。近江国で逼塞していた木村重成を大坂城に引き取ったのは加藤清正であった。が、入城後、学問・武芸、特に剣術・兵法を教授したのは且元であった。スカウトしたのは清正であったが、育てたのは且元である。清正が真田幸村・後藤基次を推薦し、且元が二人をスカウトしたのは『厭蝕太平楽記』と変わらない。『本朝盛衰記』では真田の出丸に且元が深く関わっていたことになる。即ち、入城以前九度山村にいた幸村は家来達に大量の材木を買わせ、それを大坂に送る。大坂でこれを受け取ったのが且元で、人に知られないように貯えておいた。この材木を使つて建てられたのが真田丸である。且元は幸村と示し合せて、石垣も拵えていた。入城後、万事行き届いた且元の準備ぶりに感心した幸村は、「自分が外に出て敵を防ぎ、且元が内に居て謀り事を考えたならば、何の心配もなかったろうに」と歎く。稀代の軍師幸村をして、その不在をここまで歎かせたのは、且元一人である。加藤清正は毒を盛られて亡くなる直前に、家来の中から木村主計頭むきものかみと荒川熊蔵を選び、大坂に仕官するよう命じる。二人が清正の遺言を伝えたのは勿論且元であり、且元の取り成しで二人は秀頼に仕官が叶う。冬・夏の陣における二人の大活躍は、『本朝盛衰記』の詳述するところである。『厭蝕太平楽記』では後藤基次の入城のところで、名前だけ出てきていた山口左馬介の経歴が語られ、且元から密使が送られて大坂に仕官する。長曾我部盛親の場合は、徳川家も彼を抱えようとしたが、且元の使者として天下茶屋の敵討の鵜幸右衛門が遣わされ、盛親は大坂に入城する。彼が城内で最初に向かったのは且元の屋敷であった。大坂を退去する且元が、重成に自分がスカウトした人物を教えるくだりは、『本朝盛衰記』にもある。その最後に且元は言う。「内々お目見えさせておいた浪人で、まだ入城していない者が五十余人居る。名の有る浪人を抱えるために、林源次郎と鵜幸右衛門を諸国に使者として派遣してきた。」使者としての林・

鶴の言動は記されていないのだが、影武者として討ち死にする以前に、彼らには豊臣家に対して功績があったわけである。確かに五十余人ともなれば、スカウトのための専従者も必要だろう。『本朝盛衰記』に登場する大坂方の豪傑の中で、且元と無縁の者はほぼ皆無である。

大筒のくだりのすぐ後に『厭蝕太平楽記』は家康と且元の間答を記している。『本朝盛衰記』も『厭蝕太平楽記』そのまま増補していない。家康「城方の勝った時と味方が勝った時と、どちらが悦ばしいか。」意地の悪い質問である。且元「自分は太閤に取り立てられた。関東に味方するのは本意ではない。寄せ手の勝利を聞けば憂い、城方の勝利と聞けば嬉しい。」^{おれ}「己にできる限りのことをした且元には、もう何も恐れることはなかったのだらう、驚くほど率直な答えである。家康「天下が予のものとなったならば、どうするか。」「弟主膳正を召し出して欲しい。自分は高野山に入る。」家康は感涙を流し、且元に暇を賜る。且元は十一月二十日に高野山へ登り、敵も味方もその進退をこぞって称賛した。大坂の陣の実録における且元はここで退場する。誰よりも苦しい立場に置かれ、終始悩みぬいた忠臣は二度と舞台に現れない。

本稿の最後に、高校生だった私が愛読していた山口瞳氏の『江分利満氏の優雅な生活』の一節を引く。

もし江分利が、発作の夏子と喘息の庄助を抱えて、もしも、この世をなんとか過したとすれば、こりや大変なことじゃないか。壮挙じゃないか。才能のある人間が生きてるのはなんでもないことなんだよ。宮本武蔵なんて、ちょっとも偉くないよ、アイツは強かったんだから。ほんとに「えらい」のは一生懸命生きている奴だよ。江分利みたいなヤツだよ。匹夫・匹婦・豚児だよ。(新潮文庫 昭和五十年十二刷)

史家の説によればむしろ平凡な人物でありながら、家康と交渉の任に就き、豊臣家の浮沈を担わされた且元は本当に「えらい」かったらう。しかし、その偉さは恐らく近代(あるいは現代)人にとって理解可能な偉さであって、たと

え事実であっても凡人の苦惱などは、実録の作者にはつまらなかった。実録に描かれたのは、凡人とは異なる傑出した人物の大いなる苦惱であった。

付記 本稿を草するに当り、平成18・19年度大阪大谷大学特別研究費の一部を使用した。

(参考文献等)

- 高木昭作『国史大事典』吉川弘文館『片桐且元』の項 一九八三
 曾根勇二『片桐且元（人物叢書28）』吉川弘文館 二〇〇一
 笹川祥生『日本古典文学大辞典』岩波書店『豊内記』の項 一九八四
 『改定 史籍集覧』第13冊所収『豊内記』一九〇二
 石岡久夫『日本兵法史』上下 雄山閣 一九七二
 『中村幸彦著述集』第10巻『舌耕文学談』所収「二 実録、講談について」中央公論社 一九八三
 『新日本古典文学大系74 仮名草子集』所収『大坂物語』渡辺守邦校注 岩波書店 一九七四
 『日本思想大系26 三河物語 葉隠』所収『三河物語』斎木一馬・岡山泰四校注 岩波書店 一九七四
 『日本随筆大成』第三期23「翁草」5 吉川弘文館 一九七八
 『武將感状記』人物往来社 一九六七
 桑田忠親『淀君（人物叢書7）』吉川弘文館 一九五八
 辻善之助『修人物論叢』所収『片桐且元論』雄山閣 一九四七
 徳富蘇峰『近世日本国民史12 家康時代 中巻大坂役』近世日本国民史刊行会 一九六四
 三浦三郎『大阪陣の起因』湯川弘文社 一九三六
 岡本良一『大坂冬の陣夏の陣』創元新書16 一九七二
 二本謙一『大坂の陣』中公新書71 一九八三
 森田恭二『悲劇のヒーロー 豊臣秀頼』和泉書院 二〇〇五

国立国会図書館 近代デジタルライブラリー『徳川太平記』

坪内逍遙『逍遙選集』第一巻所収『桐一葉』『沓手鳥孤城落月』『沓手鳥孤城落月』と史実との関係（復刻版）第一書房 一九

七七

高橋圭一『片桐且元と大筒』『江戸文学』31 二〇〇四年十一月

安部龍太郎『密室大坂城』講談社文庫 二〇〇〇

